

地方史研究の現状

— 44 —

広島県



西別府元日
中越利夫
角重始
秋山伸隆
中山富隆
勝部眞人

モミジ(県花)

一 総 説

一九六五年一〇月「地方史研究の現状・広島県」(日本歴史「二〇九号」)において、戦後二〇年の広島県における地方史研究活動を総括した渡辺則文氏は、研究成果の蓄積を積極的に評価する一方、次の二点を問題点として提起した。

①当時の研究活動の中心の主体となっていた芸備地方史

研究会の運動論的な弱点の克服(換言すれば広島県域の地方史研究活動のセンター的主体の登場)

②県内史料ならびに行政文書の組織的調査と保存・活用機関の創設(県立文書館の設立)

渡辺氏の提起から三五年になろうとする今日、後者の課題は実現され、地道な収集・整理作業がなされ、その成果も蓄積されつつある。また、埋蔵文化財に関しても、広島

県埋蔵文化財調査センターが一九七八年に創設され、各自治体も調査体制を整備するなどの努力がはらわれているが、なおいっそうの充実がのぞまれる。これらの機関などから発刊される報告書や、「ひろしまの遺跡」(県埋蔵文化財調査センター)・「安芸のまほろば」(東広島市教育文化振興事業団)などの広報誌は、貴重なデータの蓄積と公開、県民意識の高揚のうえで有益である。

前者の問題は、本稿で言及すべきところではないが、一九七九年に地域団体の孤立分散の状況の克服を目的に「広島県郷土史研究団体連絡協議会」(現広島県郷土史研究協議会)が結成された。現在四〇団体が参加し、総会と機関誌刊行によって相互交流がはかられている。

なお、こうした県内地域団体の活動の前提となり成果ともいべき自治体史の編纂事業も、一九七二―八四年の「広

『島県史』の編纂・刊行をはじめとして、各市町村でも遂行されている。その成果と課題については『芸備地方史研究』（以下『芸史』と略す）の特集（一九五・一九六合併号・九五年）、一九九号（九六年）があるので、参照されたい。

渡辺氏の指摘にもあるように、広島県地域の地域史研究の軸となってきた芸備地方史研究会では、一九七五年に「芸備地方史研究文献総目録Ⅱ」（『芸史』一〇〇・一〇一合併号）、八三年に「芸備地方史研究文献目録Ⅲ」（同・一四二・一四三合併号）、九七年に「芸備地方史研究文献目録Ⅳ」（同・二〇三・二〇四合併号）を編集し、また「広島県地方史の成果と課題Ⅱ」を「一四九〜一七〇号」に分割掲載している。とくに「成果と課題Ⅱ」は、本稿に先行する八〇年代前半以前を整理しており、あわせてご参照いただければ幸いである。

また、紙数などの関係で、言及しなければならぬ論考を紹介できなかった点も多い。論者ならびに読者のご寛容をお願いしたい。なお以下では敬称を省略させていただく。

（にしべつぷ・もとか 広島大学文学部助教授）

三 古 代

いわゆる『風土記』や、古代の公文書である四度公文とその枝文などとも無縁な広島県地域の古代史研究を進めるうえで、歴史地理学や考古学的知見の摂取は不可欠の作業である。こうしたなかで、文献史料に関しての『広島県史』古代中世資料編、考古資料についての『広島県史』考古編がはたしてきた役割は大きい。このほか脇坂光彦・小都隆『日本の古代遺跡26 広島』（保育社、一九八六年）も歴史考古研究の手引きとして有益であり、佐々木卓也『芸備両国の条里遺構』（溪水社、一九九六年）も刊行された。

大化前代の地域社会

広島県域は、古墳時代に独自の政治的地域社会を形成した吉備・出雲に隣接する地域である。したがって、門脇楨二（『出雲の古代史』・『吉備の古代史』）、ともにNHKブックス、一九七六・九二年）と吉田晶（吉備地方における国造制の成立）『歴史学研究』三八四、一九七二年）を含む『吉備古代史の展開』

塙書房、一九九五年)の研究が、広島県域とりわけ東部(備後)・北部(備北)における六・七世紀研究の起爆剤的役割をはたした。

考古学的知見から備後地域の政治的社會の成立を論じた西川宏「吉備における備後地域の歴史的位置」(芸備友の會『芸備古墳文化論考』一九八五年、以下「芸備古墳」と略す)、大和王権による三次地域社會の再編の可能性を論じた古瀬清秀(「備後の古墳」近藤義郎編『吉備の考古学』福武書店、一九八七年、「古墳時代における備後北部の特質」近藤義郎編『吉備の考古学的研究』山陽新聞社、一九九二年)、古代国家形成期の安芸東部さらには備後への官吏派遣の可能性を視野にいれ畿内系勢力の進入を指摘した脇坂光彦の研究(「山陽道における終末期の畿内型横穴式石室墳」『考古学と移住・移動』同志社大学、一九八五年、「石室の特徴からみた御年代古墳の性格」『芸備古墳』、「古墳時代終末期における畿内型古墳の地域相」潮見浩先生退官記念事業會編『考古論集』、一九九三年)などのほか、田辺英男「竹原市毘沙門岩下採集の陶棺」(「芸備古墳」)や河瀬正利「広島県出土の鳥形須恵器」(同)も、県域の地域的特性を考える上で注目される。

こうした研究成果に依拠しながら久替成治は、「備後における国造制の成立とヤマト政権」(「福山市立女子短期大学紀要」一三、一九八七年、以下「女子短紀要」と略す)、「備後地域に

おける部民制についての「考察」(『芸史』一七一、一九八九年)、「備後地域における部民制と古墳群・補考」(『女子短紀要』二六、一九九〇年)、「古代国家形成期における備後の古墳と寺院」(同一四、一九八八年)、「記紀における備後伝承についての基礎的考察」(『文化史学』四四、一九八八年)などで、吉田の所論を批判的に検証し当該地域の動向を考察した。

古代寺院と古代道路

寺院研究においても大きな進展がみられた。とくに松下正司(「備後北部の古瓦」『考古学雑誌』五五―一、一九六九年)によつてその地域的特性と編年観が提起された、いわゆる「水切り瓦」と寺院跡の研究が進展した。その大きな要因は一九七〇年代後半の岡山県栢寺廃寺と広島県寺町廃寺の調査、さらに上山手廃寺・横見廃寺・明官地廃寺などの調査による資料増加である。寺町廃寺を『日本霊異記』にみえる三谿寺とすることへの疑問(上重武和「寺町廃寺は三谿寺か」『三次地方史研究』一、一九八七年)や、寺町廃寺出土の素弁・複弁軒丸瓦を時間的経過のなかでとらえ、複弁軒丸瓦の創出の背後に当該地域の造寺活動の政治性を見ようとする妹尾周三(「安芸・備後の古瓦(その二)」『古文化談叢』二六、一九九一年)、寺町廃寺創建瓦と栢寺廃寺出土瓦の同範囲係から工法・工人の関係を論じた岡本寛久(「水切り瓦」の

起源と伝播の意義」前掲「吉備の考古学的研究」の研究などが発表され、これらの論点をふまえ松下が若干の修正・反論と再整理（「水切瓦再考」前掲『考古論集』）を行っている。

水切り瓦が備中・出雲にも確認されることで中国地方のなかでの位置付けも不可避となり、亀田修一「瀬戸内海沿岸地域の古代寺院と瓦」（松原弘宣編『古代王権と交流六 瀬戸内海地域における交流の展開』名著出版、一九九五年）は、朝鮮系瓦との類似性を強調している。また妹尾周三は「横見廃寺式軒丸瓦の検討」（『古代』九七、一九九四年）などの個別的研究をふまえながら、「瓦からみた安芸と備後」（『広島県立歴史民俗資料館研究紀要』一、一九九七年）や「備後南部地域の『藤原宮式』軒瓦について」（『文化財論究』一、一九九八年）などで、古代瓦からみた芸備両国内部の地域性の相違や編年的研究を推進している。なお、広島県立歴史民俗資料館が一九九八年度に開催した企画展「ひろしまの古代寺院」のパンフレットは、古代寺院に関する関連資料をひろく収録し有益である。

埋蔵文化財調査に伴う古代道路遺構の確認が九州・関東などで相次ぎ、古代交通研究、さらには地域構造の究明が模索されるようになり、その動向は広島県域にも波及した。足利健亮「吉備地方における古代山陽道・覚え書き」（『歴史地理学紀要』一六、一九七四年）ならびに「備後国」（『古代日

本の交通路』Ⅲ、大明堂、一九七八年）、水田義一「安芸国」（同）は、歴史地理学の立場からの嚆矢といえよう。その後足利は「山陽・山陰・南海三道と土地計画」（八木充編『新版古代の日本』四、角川書店、一九九二年）によって、東広島市西条町寺家付近に山陽道の道路遺構を想定している。

これに対し、山陽道駅家を瓦葺とする官符があることに着目した高橋美久二は、国府系瓦の出土地を山陽道駅家に比定する考察を行った（『古代交通の考古地理』第三章四―五節、大明堂、一九九五年）。また谷重豊季「備後国府付近の山陽道」（『古代交通研究』五、一九九六年）も、高橋説などを継承しつつ、考古学的知見をもとに府中市周辺の古代道路を具体的に検証した。木下良も広島市東区に古代官道遺構を想定している（『日本古代律令期に敷設された直線の計画道の復原的研究』平成元年度科学研究費補助金研究成果報告書）。しかし、古代山陽道に関しては十二分な現地踏査や地名研究がなされていない地域が多く、また駅家としてほぼ断定しうるのは安芸駅（河瀬正利「広島県下岡田遺跡の古代建物群をめぐって」前掲『考古論集』）であるが、畿内山崎駅の事例を勘案して下岡田遺跡の整備・修築を桓武朝の平安京造営の時期とみる山中章「安芸国安芸駅館小考」（『広島県文化財ニュース』一六〇、一九九九年）以外、専論はない。こうした古代山陽道研究の立ち遅れは、文化庁の提唱した「歴史の道」

調査を実施しなかった広島県教育委員会の姿勢にも一因がある。全国的古代道路研究の手法に学びつつ、古代互研究との並行的研究が追究されなければならない。

古代官衙と地域社会

古代国家の造営した官道の結接点たる官衙についての研究も広島県は立ち遅れの感がある。備後国府については、一九八二年から九一年にかけて断片的発掘調査が継続実施され、明確な官衙遺構は確認されないものの、奈良時代の遺物・遺構の豊富さからほぼ国府域を推定しうる（片山和哉「備後国府跡の所在地について」『芸備』一八、一九八七年、谷重豊季「備後国府跡について」『地域社会教室論集』五、一九九〇年）にいたっている。これに対し安芸国府はまだ歴史の闇のなかにある。現在日向国衙と思われる遺構を検出している宮崎県での調査事業のように、考古・文献・歴史地理などの諸学問分野の研究者を組織し、過去の推定地や官衙的遺構を逐一吟味し、絞り込んでいく息の長い基本的作業こそが、いま必要なのではなからうか。

郡衙に関しては、三次市の下本谷遺跡が三次郡衙とされているが、そのほかについては不明である。下本谷遺跡出土遺物の少なさから周辺遺跡との関連を考察する必要を指摘した樋井勝「古代における地方『官衙』について」（『芸備』

二三、一九九四年）や、広島地域の郡衙研究の現状を整理し向原町寺之下遺跡など向原地区から甲田町高田原地区への高田郡衙の移転を提示した中村尚「郡衙所在地についての一考察」（『研究輯録』Ⅳ、一九九八年）以外、官衙的遺跡に言及した論稿はない。芸備における官衙的遺構としては甲田町青迫遺跡や吉田町明官地東遺跡などが注目されている。

官衙は行政事務遂行のため、多くの行政文書を作成したが、新潟・長野・兵庫などで出土した郡符木簡などは、こうした行政文書の一部が木簡で代行されていた可能性を示唆している。吉田町郡山城下町遺跡出土の「高宮郡司解」木簡も、その一端を示すものといえよう。この木簡については、『芸史』一九七（一九九五年）が特集を組み、樋井勝「郡山城下町遺跡」出土木簡の観察、佐竹昭「郡山城下町遺跡」出土木簡をめぐる二つの問題、宇根俊範「郡山城下町遺跡出土木簡」の人名について」の三稿を掲載している。樋井は出土木簡の形態や文字配列・運筆などを整理し、佐竹は他遺跡出土の「郡司解」木簡の分析から当該木簡の公文書としての可能性、さらには「占部連」氏族の地域資料としての意味を考察し、また宇根は墨書「占部連（通）千足」の氏名としての可能性について論じている。出土文字資料が希薄な地域で、かつかつての下岡田遺跡出土木簡の事例を教訓とした積極的対応として評価したい。なお、出土文

字資料を収集整理した楳井「広島県出土古代文字資料集成（稿）」（『芸史』二〇一、一九九六年）も有益である。

官衙ないしはこれに関連する西日本の遺構では、九世紀後半以降の緑釉陶器さらには貿易陶磁器が出土し、交易・物流を研究する素材として注目されはじめているが、広島県域の遺跡でも、やや時代は下るが同じ視角がすでに草戸千軒遺跡調査段階から意識されていた。福山市ザブ遺跡出土の緑釉陶器を十世紀前半の良好な資料と結論した前川要「広島県ザブ遺跡出土平安時代緑釉陶器について」（『中近世土器の基礎研究』V、一九八九年）、県内初期輸入陶磁器の出土分布から交通路と遺跡の性格を考究した佐藤昭嗣「安芸・備後における初期輸入陶磁器について」（『青山考古』八、一九九〇年）、鈴木康之「備後における古代末期の土器の様相」（前掲『考古論集』）などの研究があり、三原市日向遺跡については篠原芳秀「日向遺跡出土の貿易磁器」（『研究輯録』VI、一九九六年）がある。

最後になったが文献を中心とした古代地域史論としては、芸備海域の特性とその国家的掌握を論じた松原弘宣（『海上交通の展開』前掲『新版古代の日本』四）、平安初期の海賊問題を沿岸諸国々司の民衆掌握の視点から論じた西別府元日「平安時代初期の瀬戸内海地域」（前掲『古代王権と交流』六）、芸備国境地域の在地構造から行政区画の可変性を論じ

た「飛鳥池遺跡出土「加毛評柞原里人」木筒について」（『内海紀要』二七、一九九九年）がある。

（にしべっぶ・もとか）